被爆五〇年のナガサキで原爆をめぐる多様な視点を読む

――新聞シリーズ記事を使って――

片桐啓恵

はじめに――単元の出発点とねらい

戦後五〇年を迎えた一九九五年。その前年ぐらいから、世界的にこの節目を迎える様々な催しが企画され、それに伴って、様々な立場・考え方の違い、対立、矛盾点も改めて浮き彫りになってきた。長崎では被爆五〇年を迎えるに当たり、被爆体験の継承と核兵器廃絶に向けての平和運動の歩みが、一つの大きな節目として総括された。その折、大きな衝撃となったのが、アメリカ、スミソニアン国立博物館のエノラ・ゲイと原爆資料展をめぐるできごとだった。結果的に、広島・長崎から貸し出された原爆資料のほとんどが削られた展示企画変更は、ナガサキでなにがしかの平和運動に参加している者はもちろん、そこまでの行動はせずとも、核兵器反対が最低限の共通認識としてある市民にとって、〝ヒロシマ・ナガサキの共通認識〟など届きようもない厚い壁があることを思い知らされるきっかけとなった。

毎年八月が近づけば年中行事のように行われるナガサキの平和学習。それもマンネリ化すれば、かえって〝平和学習嫌い〟を生む。被爆五〇年というだけでは、〝現在（いま）〟を生きる生徒たちにとって自分の生活につながる意味はあまりない。一方では、戦後五〇年・被爆五〇年だからこそ、新聞記事も出版物も特集物が洪水のように出回る。まさに単元学習のための資料・教材の揃え時である。ポイントは、どの問題を軸にし、どのように切り込み、どんなテキストを組み合わせ、どんなことばの力を育てるか。

スミソニアンの問題から切り込めば、ナガサキと私たちの問題が見えてくる。多様な視点の違いを比較読みするのに格好の材料となる。一つの問題から次の疑問・課題へと有機的に連なり〝同時代を生きる力〟としての視点が形成されていく。それが自分の考えを持ち、自分のことばで表現する力になる。

一九九五年度は2年生と3年生を担当していたが、この単元は二つの学年で同時に行うことにした。テキストの〝旬〟を考えると、学年に関わりなく今やっておかなけれ

ば、と思った。さらに、次の年は、この二つの学年が一緒に修学旅行（行先は沖縄）に行く予定で、その平和学習につなげる意味でも、二学年同じ内容で学習する意味が大きいと判断した。

1、単元〔私と世界と平和〕の構成と展開

(1) 単元の構成と目標

単元全体の構成は図①に示す。

一九九五年度二学期九月～十二月の授業。

対象は、2年普通科　1組（十六名）　2組（十六名）

2年商業科　3組（十五名）

3年普通科　1組（二十六名）

単元の目標は次の三点。

1、一つの問題をめぐる多様な視点があることを理解し、それを比べつつ、自分の意見を形成する。

2、新聞記事レベルの文章を読み、理解する力をつける。

3、同時代を自分自身の問題として生きるための事実認識力、意見表現力を育てる。

この単元の教材はすべて自主教材。テキストも学習ノート（ワークシート形式）も一貫したプリントとして配り、最後に一冊のノートとなるよう製本する。

夜間定時制単独校である本校の国語科のカリキュラムは普通科が1年4単位（国語Ⅰ）・2年3単位（国語Ⅰ）・3年3単位（国語Ⅱ）・4年3単位（国語Ⅱ）、商業科が1、2年各2単位（国語Ⅰ）・3、4年各2単位（国語Ⅱ）となっている。普通科と商業科で単位数が違うが、実際には生徒の出席率が七～八割程度なので、ワークシートによる個別学習を中心に進める場合、クラスとしての授業時数の多少の違いはさほど支障にはならない。

(2) 新聞シリーズ記事をテキストにする理由

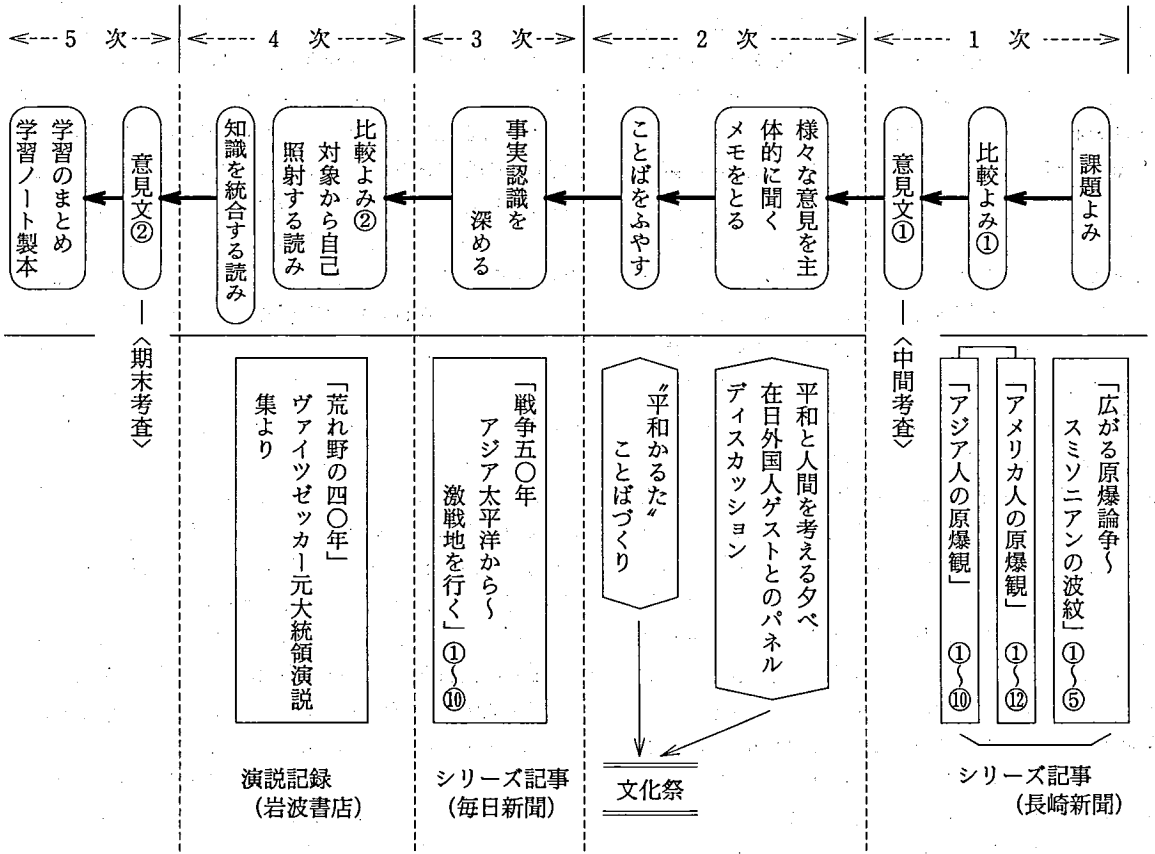
同時代の問題、タイムリーな話題を主題とする場合、新聞記事は重要な教材となる。ただし、新聞記事の特徴として、限られた枠組・字数のため省略表現が多い独特の文体になること、あくまでも取材者・編集者からの視点を通した一面的なものであること、が挙げられる。速報性ではテレビ等に劣る新聞の記事が教材として価値を発揮するのは、〝特集記事〟〝シリーズ記事〟の部分である。シリーズ記事は、一つのテーマを様々な角度から、複数の人々に取材することで、一面的なアプローチという弱点をカバーする。特集記事は、その特集の設定ゆえに、〝視点〟をより明確にする。

戦後・被爆五〇年の特集、またスミソニアン問題をめぐる報道、出版物を一年程前から意図的に集めていたが、その中から二つのシリーズ記事を取りあげることにした。

〝世界は被爆体験を共有できたか〟（長崎新聞）

第一部「広がる原爆論争～スミソニアンの波紋」①～⑤

〈図①〉 単元〔私と世界と平和〕の構成



第二部「アメリカ人の原爆観」①～⑫
第三部「アジア人の原爆観」①～⑩
〝戦後五〇年〟（毎日新聞）
「アジア・太平洋から～激戦地を行く」①～⑩

長崎新聞の第一部は、スミソニアン問題の過程・背景を通して現状を認識する総論的テキスト、第二部は総論の中で簡素に触れていた様々な立場の人を一回に一人ずつインタビュー記事としてまとめ、〝アメリカ人〟と一括りにできない多様な意見を浮かびあがらせる。第三部では、アメリカ人とは別の体験ゆえにさらに複雑な背景を伴うアジア各国のいくつかの意見がつきつけられる。第三部が投げかけるものは言いようがないほど重い。その根深さは、過去の歴史についての知識が浅くては理解できない。それを補うのが毎日新聞のシリーズ記事である。

(3) 課題よみ――事実関係を読みとる

課題よみとは、問いを手引きとして、文章中の事実関係を正確に読みとるレベル。基礎的読解の段階である。学習ノート（ワークシート）の問いに答えることで正確な読みを引き出す。この段階では読み手（学習者）の意見は問わない。問いは客観問題なので、一つ一つの問いに対して的確に答えられているかどうかを丁寧にチェックして、理解への手引をする。ここでの理解がきちんとできていれば、次の比較よみで大量のテキストを与えても一人よみができる。

(4) 比較よみ①～意見文①（短い意見文）

比較よみとは、文字通りテキスト（複数）を比較しながら読むことで、ある主題や事柄について多様な視点・考えがあることを認識し、自らの視野を広め、考えを深めていく読みの段階である。従ってこの段階では、単にテキストの内容を読み解くだけでなく、比較分析を通して自分自身の考えもつき合わせながら読む〝批判よみ〟をも含むことになる。

長崎新聞シリーズ記事「アメリカ人の原爆観」「アジア人の原爆観」は格好の比較読みテキストであった。原爆肯定派、否定派、戦争体験の有無、世代の違い、白人系、アジア系、と様々な立場の人が登場する。比較よみのポイントは、①広島・長崎への原爆投下をどう考えているか、②スミソニアン展示問題をどう考えているか、③現在・将来にわたる世界の核状況をどう考えているか、以上三点である。その背後に各人の立場や体験がある。しかし、それは単純な因果関係ではない。同じ元軍人でも、原爆肯定派と否定派に分かれる。それはなぜかというところまで考える必要がある。

様々な立場があるとは言え、それでも第二次世界大戦はファシズムと戦う〝正義の戦争〟だったと大多数が信じることができるアメリカ人。〝正義〟に誇りを持つからこそ、原爆が一般市民への無差別大量殺人兵器だったと認識すれば、原爆投下の非を認めもする。

しかし、アジアの人々の視点は違う。〝加害者・日本〟への忘れることのできない思い、戦後五〇年たっても精算されない日本の戦争責任、今なおあまりにも深い傷跡と心の溝があるために、〝ヒバクシャ〟との共感は隔てられる。

この学習ではアメリカ人十二人の中から三人、アジア人十人の中から三人、それぞれ立場・意見が異なる人を自分で選んで学習ノートにまとめた。「アメリカ人の原爆観」「アジア人の原爆観」は色の違う紙にプリントし、独立した冊子として一度に渡した。

比較よみでまとめたものを教材として、自分の考えを加えて書く意見文を、この単元の中間のまとめとした。定時制では家庭学習を前提とした課題提出は設定できない。かつ、普段の授業出席率が安定していない、という状況であれば、どうしてもクリアさせたい学習課題は定期考査の中に設定するしかない。授業はさぼりがちでもテストだけは受けなくては、と思っている生徒たちの気持ちを、こちらとしても最後の砦として勝負をかけるのである。

この段階の課題は、意見文と言えるほどもない短い文章だが、三者の異なる意見がきちんとまとめられ、それに対する自分の考えが述べられればよしとする。

(5) パネル・ディスカッションへの主体的傍聴参加

新聞記事で様々な人の意見を読み、知識は視野が広がっても、それはまだ見知らぬ遠い人たちである。身近な所で実際にいろいろな国の人たちの意見を聞いてみたらどうだろう。被爆五〇年にちなんで学習しているこの年、世界ではフランス・中国の強引な駆け込み核実験が問題となっていた。この点も含めて、直接いろいろな国の人の意見を聞く学習を組み込みたいと思った。

四年前（一九九一年）、別の学年で〝世界と日本の共生〟のテーマを扱い、在日外国人の様々な問題を考え、その上で「外国の人にインタビューしよう」という学習を行った。その時は、学習者全員に役割を与えて参加させるため、質問内容が極めて単純なレベルだったこと、四人のゲストが全部欧米系で多様性という点で不十分であったことが課題として残っていた。しかし、生徒たちの意欲的な学習姿勢と、異質なものとの出会いに自ら参加して得た成果は顕著で、いつか機会があったら再びやってみたいと思っていた。その機会がやってきた。

折しも校内の同和・人権教育担当の先生（社会科）から、今年の「平和と人間を考える夕べ」（前年度から本校で始めた学校行事）に何か企画はないだろうかと持ちかけられた。そこで「今、授業の中で在日外国人ゲストを招いて、被爆五〇年をめぐるパネル・ディスカッションを計画してるけど、よかったら学校全体の行事としてどうですか」と誘い込んだ。計画はそのまま進み、十月下旬の一日（約三時限分）を使って、全校参加の行事となった。

学校行事として企画・運営していく一方で、私自身は教

科学習の一貫として計画しているので、どのような参加形態なら学習者のことばの力を育てられるのかを考えなければならない。

パネラーには、長崎市内在住の外国人五名（出身国…インドネシア、アメリカ、ザンビア、フランス、ニュージーランド）、それに本校生一名の計六名。パネラーとなる生徒以外は聞き手となる。質疑応答の時間を設けても発言できるのは数名。ここでは〝主体的な聞き手〟を育てることを目標とする。

〝主体的な聞き手〟となるためには、話されるテーマ・内容についての知識と問題意識が必要である。新聞シリーズ記事を使ってのここまでの学習が導きになっているはずだが、目の前に迎える一人一人のゲストへの関心に結びつけるのには、もう一段階の手だてがいる。そこで「質問カード」をつくる。全員が直接質問することはできないが、自分なら何を聞きたいかと考えることで、学習した内容とゲストと自分を結びつけていく。また、会場（体育館）でも聞きとりメモを記入することで、傍聴者ながら集中して参加するよう促す。企画の段階では、他の教員から「普通の授業で十五分も集中できない生徒たちが、英語・日本語入り混じっての一時間以上のディスカッションに集中できないだろう」という不安も出たが、実際には一時間半の行事に生徒たちはしっかり集中していた。

(6) 〝平和かるた〟づくり――文化祭展示の機会にことばを増やす

十一月上旬の週末に本校の文化祭は行われる。放課後も休み時間もほとんどない定時制としては、毎年かなり奮闘して充実した文化祭を創っている。私自身は教科としても学習成果の一端を展示などで示すことを年間計画の中に入れている。今回は授業関連の展示として三つのものを入れた。①アメリカ人の原爆観・アジア人の原爆観を比較読みしての意見文、②「平和と人間を考える夕べ」の記録、④〝平和かるた〟のことばづくり。

〝平和かるた〟ことばづくりとは、読み札のことばに当たる短文をつくるもので、あ～をの五十音を頭につけた短文を考えるために、テキストで出会ったことばを取り入れたり、辞書を引いて語彙を増やしたりすることがねらいである。

(7) 疑問から認識を深める読みへ

第一次の学習で「アジア人の原爆観」を読んだ際、アジアの人々のここまで根深い日本不信・日本批判はどこから出てくるのだろうと思わされる。太平洋戦争について、日本の植民地支配について、知識がほとんどない生徒たちには、アジア人の原爆観の背景がわからない。その知識不足を補い、認識を深めるためのテキストとして別のシリーズ記事を読む。ここでの目的は、太平洋戦争中、各地で起こっ

た事実を認識すること、その事実が現在に与えている影響を記事から読み取ること、その読みとった内容を既に学習したテキストの内容と関連させて思考すること、である。

(8)「比較よみ②（対象から自己照射する読み）」「知識を統合する読み」

比較よみ①がテキスト（複数）そのものの中に比べるべき対象がある場合の読みとするなら、比較よみ②はテキストの中に直接比べるべき対象があるのではなく、テキスト中の事例から比較されるべき対象を読み手自身が引き合わせて読む活動として設定する。テキストの事例に引き合わせるのは、自分に関わるもの・こと、または自分につながってくるもの・ことであるから、比較読み②のレベルは〝自己照射〟の読みと考えてよい。

この単元では、最後のテキストとしてドイツ元大統領ヴァイツゼッカー氏の講演録「荒れ野の四〇年」（抄）を読むことで、ドイツの事例に日本の事例を引き合わせ、氏の主張・指摘に自分の考え・生き方を照らし合わせていく。また、その過程でこれまでのテキストで読んできたこと・考えてきたことがトータルに関連して生かされていく。（この講演録はそういう力を持つテキストである）つまり、ここでこれまでの学習で得た知識を統合していく読みとして位置づけられる。

(9) 意見文②（やや長い文章）を書く

単元後半の材料を中心として、〈私と世界と平和〉というテーマで意見文（七〇〇～八〇〇字程度）を書く。意見文①はメモを少しふくらませた程度のものだが、意見文②は取材・構成・表現を意識的に行う活動として設定。

この単元では意見文②のレベルを目標とするが、これは、次の単元で本格的に評論文（二〇〇〇～三〇〇〇字程度）を書くためのステップとしても位置づけている。

2、単元の学習から学校行事へ、その後の学習へ

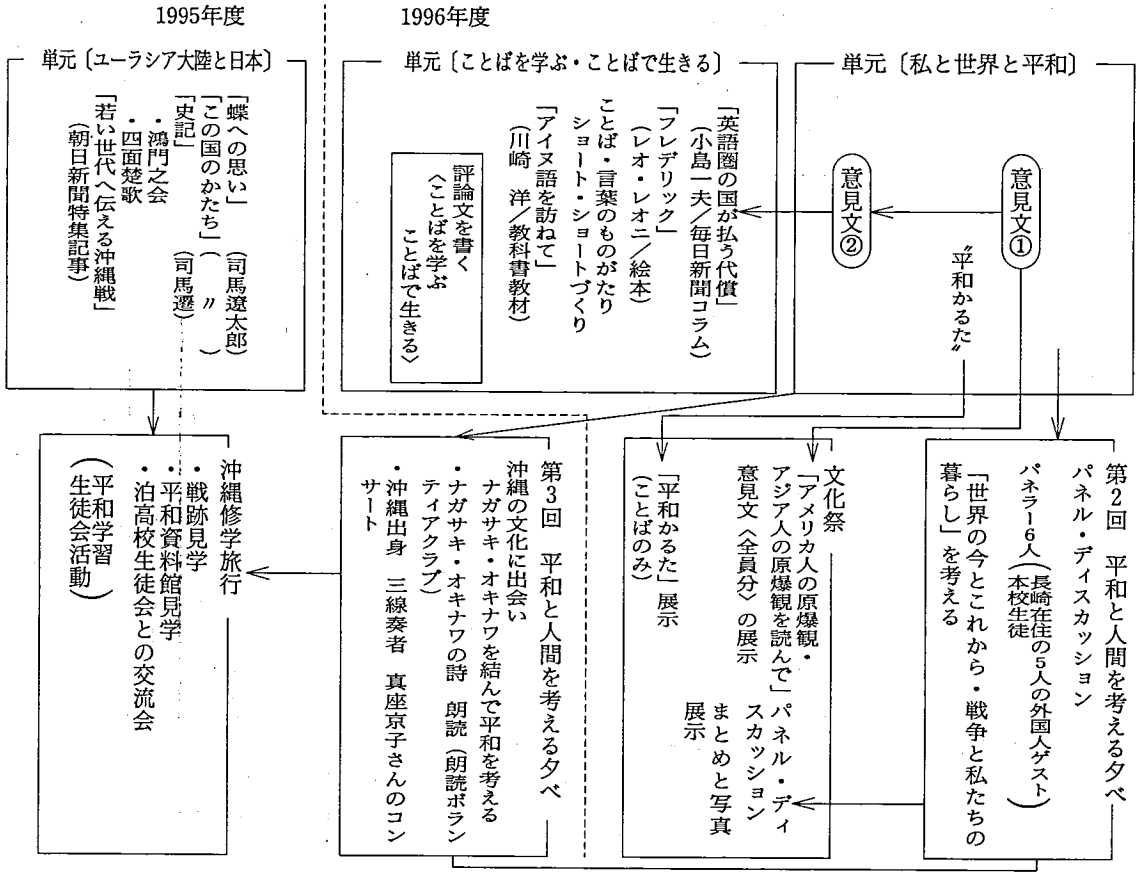
一つの単元はそれだけで完結する学習ではなく、そこで生まれた疑問・課題に挑むために次の単元が生まれる。図2に示すように、テーマ面・言語活動面双方でその後の学習へつながっている。

また、学校行事（「平和と人間を考える夕べ」・文化祭・沖縄修学旅行）ともつながっている。学習が教室内で終結するのではなく、生活の中に活きていくよう組み立てていく。授業時数の少ない定時制では、話す力を使う学習をなかなか組めないが、行事を組み込むことで、多様な言語活動がなされる。

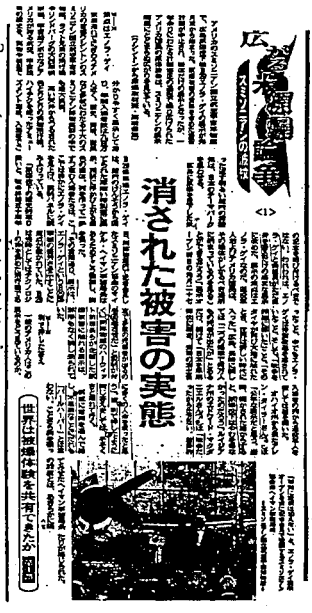
長期的視野の中に単元を置くと、学習した成果がどこでどのように出てくるかを、さまざまな場面で見守っていくことができる。

（長崎市立長崎高校）

〈図②〉 単元相互・単元と行事の関連



資料① 学習ノート「広がる米原爆論争―スミソニアンの波紋」
～事実関係を読み取る



資料② 学習ノート「アメリカ人の原爆観」「アジア人の原爆観」
～異なる視点・主張を比較よみする

資料③ 学習ノート 比較よみに自分の考えを加えて文章でまとめる

▨〈アメリカ人の原爆観〉1～12の中から、立場・意見の異なる3人をとりあげ、それについて述べなさい。（印象に残ったこと、感じたこと、考えたことなど）

とりあげる人	（番号）	（名まえ）
	2	ブレッチャー・ブラウティ
	5	マリー・デニス
	12	ジョセフ・ガーソン

ブレッチャーさんがいうように、原爆でなくても長い時間がかかって、多くの人が死んだかもしれない。戦争が長びけば長びくほど、たくさんの人が苦しむ。だけど、戦争を終らせるには本当に原爆しか手がなかったのだろうか。マリー・デニスさんがいうように、原爆投下には正当な理由はないと思う。自分の身内が助かるためには、他人の命などどうでもいいなんて考えはおかしいと思う。だけど、あの時は、すべての人が正常ではなかったので、そう思ってしまうのはしかたがないと思う。核兵器の使用は正しかったのかまちがっていなかったのか、戦後50周年の今、これからの未来のためにも決定する段階にきていますというジョセフさんの考えにも賛成です。両者の意見ばかりでなく、両方・そして第三者の意見もあつめて よく考えていくべきではないでしょうか。

▨〈アジア人の原爆観〉1～10の中から、立場・意見の異なる3人をとりあげ、それについて述べなさい。（印象に残ったこと、感じたこと、考えたことなど）

とりあげる人	（番号）	（名まえ）
	1	ライ・アチョウ
	7	車貞述
	9	朴性極

ライさんのいうことはもっともだと思う。日本は被害者ぶってばかりで加害者だということを忘れている。この状態で、平和条約を結んでも無意味だと思う。車さんがいうように、責任は日米両国にあると思う。そして日本は戦後処理をしていない。ごまかそうとしているというのもその通りだと思う。それなのにアメリカと日本が責めるのはおかしいと思う。

朴さんたち第三者の人たちは、日本もアメリカも、どちらも加害者だと考えている。しかし原爆投下は絶対にしてはいけない行為だと考えている。アメリカは、アジアを救うために原爆投下したのではなく、アメリカ自身のために使ったと考えるのが正しいと思う。原爆のせいで、アジアの人は、ますます苦しめられたと思う。

資料④ 中間考査 比較よみ→意見文

3

マリー・デニス：彼女が考えるように原爆投下には正当な理由はない。原爆のおかげでアメリカ軍人である息子は助かったというが、原爆のせいで、息子や両親・身内もなくした人は日本にいるのです。自分の大切な人のためになら他人の大切な人はどうでもいいと思えるのはおかしいと思う。

ライ・アチョウ：日本は確かに被害者ぶってばかりいて、アジアの国々について戦後処理をしていない。このままでは、日本がどんなに平和運動をおこなっても、アジアの人たちは、共感してくれないと思う。

朴性極：アジアの人たちは、日本もアメリカもどちらも加害者だと思っている。あたり前だと思う。第二次世界大戦で一番苦しめられたのは、アジアの国々の人々だと思うから。

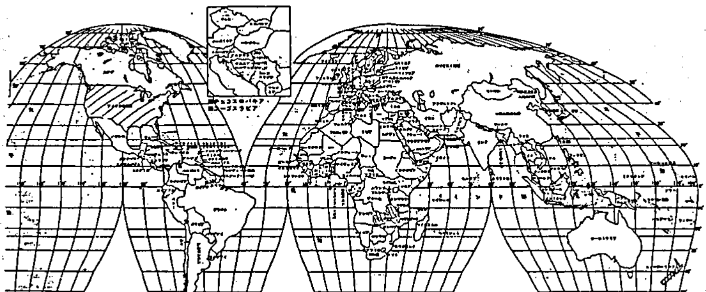
資料⑤ 学習ノート “平和と人間を考える夕べ”（パネルディスカッション）に主体的に参加するための準備 ～質問カード

国語I・II 単元「私と世界と平和」 学習ノート （3年（2）組（ ） ）

「平和と人間を考える夕べ」（7/31（月））で、実際にいろいろな国の人（長崎在住）の考えを聞きます。ここまで学習してきたことをもとに、直接きいてみたいことを書き出してみよう。

▨「平和と人間を考える夕べ」パネル・ディスカッションのパネラー（敬称略）
- デボラさん（インドネシア）
- ジョンさん（アメリカ）
- デニスさん（ザンビア）
- ヤイセディーさん（ガーナ）
- ポールさん（ニュージーランド）
- オディールさん（フランス）
- 田中里枝さん（本校主任）

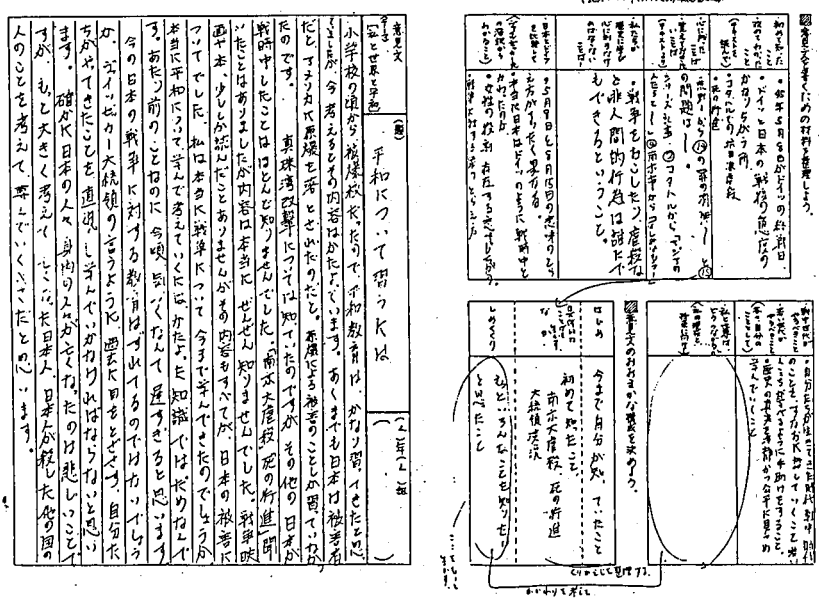
▨パネラーの出身国を上の地図から探して印をつけよう。



▨だれに、どんな質問をしたいか書き出してみよう。 第二次世界大戦

質問したい人	質問したい内容
デボラさん	・戦時中インドネシアの人々に対して、日本兵はどのように接していたのですか。
ジョンさん	・自国が核兵器をもっていることをどう思いますか。
デニスさん	・南アフリカ共和国でのアパルトヘイトについてどう思いますか
ポールさん	・ニュージーランドでの第二次世界大戦の被害はどれくらいのものだったのですか。
オディールさん	・この前の核実験について、反対でしたか
田中里枝さん	・被爆地長崎に生まれたことについてどう思いますか ・平ゼミに参加してどうでしたか。
全員	・フランスの核実験をどう思いましたか。

資料⑥ 学習ノート 意見文「私と世界と平和」を書く



意見文「平和について思うには」

小学校の頃から、戦争、戦争、たりで、平和教育は、かなり習ってきたと思います。今考えるその内容はかたよっています。あくまでも日本は被害者だと、すなわち悪魔による被害のことしか習っていなかったのです。

真珠湾攻撃については知っていたのですが、そのほかの日本が戦時中したことは、ほとんど知りませんでした。「南京大虐殺」「死の行進」「開戦したことは、ありましたが内容は本当にせんせい知りませんでした。戦争映画や本、少しとか読んだことありませんが、その内容もすべて、日本の被害について、でした。私は本当に戦争について、今までそんなことのでしょうか。本当に平和について学んで考えていくには、かたよった知識ではやめなんです。あたり前のことなのに、今頃気づくなんて、遅すぎると思います。

今の日本の戦争に対する教育はずいぶんのでは、かいでしょうか。ずいぶんカー大統領の言うように、過去に目をとざす、自分たちがやってきたことを直視しなければならないと思います。確かに日本の人々、身内の人が亡くなったのは悲しいことですが、もっと大きく考えて、さいごは、日本人、日本が殺した他の国の人のことを考えて、学んでいくべきだと思います。

資料⑦ 〝平和かるた〟（ことばづくり）作品例

2の2　梅本　トミ

あ　あいまいな日本列島どこへゆく
い　いさぎよく真実語る者（権力者）は無し
う　肌えしのぐ人のまだいる地球上
え　えらい人　えらぶるばかりで実がない
お　沖縄のあまりに大きい犠牲圏
か　核兵器我が住む処を灰にして
き　聞こえぬか　シラク馬耳東風のムルロアか
く　権力者　沖縄泣かす口ばかり
け　国税も官接待に消えてゆき
こ　先はなし　水俣被害者泣きねいり
さ　幸せは世界平和と己が無事
し　すしのねた　マングローブを痛めつけ
す　世話好きのボランティアの心意気
せ　走馬灯　きのうのニュースも止度かず
そ　立ち遅れ　アジアに詫びの言えぬ国
た　小さくとも声を出そうよ反核に
ち　つまらぬと選挙に行かぬつまらない人
つ　手をつなぐ平和尊し差別なし
て　同士討ち　サラエボのオリンピックも夢の跡（ユーゴスラビア）
と　仲たがい　人死ぬ街死ぬ国も死ぬ（ユーゴスラビア）
な　ぬるま湯の中の人間役立たず
ぬ　年月日　戦争終始の日がのこる
ね　のれん押し　シラク押しても知らん顔
の　はがき出す　フランス大使へ抗議文
は　被爆者の悲しみの声老いてゆき
ひ　ぶたびの悲惨原爆ゆるすまじ
ふ　塀壊す東ドイツに西ドイツ
ほ　ポイ捨てのタバコ地球を灰皿にして
へ　まつたけの値段ばかりの秋がゆく
み　みことのり　我が青春をふみにじり
む　虫メガネ　大臣の腹を探りたし
め　明快な答えの出ないお大臣
も　もうたくさん　戦争やめてよ人殺し
や　薬石の効なく逝きし父被爆

資料⑧

◆意見文［私と世界と平和］

①　　しることで　　（3年　十八歳　I・Kさん）

「知る」という事は、今までとは、ちがう視点でものが見られると思います。

平和について考える時もその事は言えます。平和を考える時、必ず「戦争」について考えなければいけません。でも私は前の大戦について、特にアジアでの出来事をほとんど知りませんでした。南京大虐殺や泰緬鉄道やその他のさまざまな事、強制連行についてです。これらの出来事は日本が今現在引きずっている問題です。ではなぜ五十年たった今でもこの事が問題になるのか、それも多くの人が真実を知らないままにです。

日本と同じように戦争を敗戦で終えたドイツはどうかというと、ヒトラーの行為はきちんと若い世代にも伝えられています。大統領も「われわれ全員が過去をひきうけなければいけない。」と言っています。ドイツも日本も五〇年前は同じような立場であったのに、過去を知り、きちんとした次の世代を作っていることで、私達とはずいぶん差ができてしまっています。アジアでの事は絶対になかった事ではないのです。その事を私達は知っていかなければなりません。知らない事は罪だと思います。伝えないことも罪です。このまま真実をかくし続けていっても、アジア世界はどうしても近くなれないと思います。真実をきちんと伝えていって、今ある問題を考えなければなりません。日本全体でもそうだけれど、私自身も知らないといけません。過去に責任を持てるようになって初めて、平和を考え、そして世界を考えないといけないと思います。私一人でも過去を知ることで、小さい事でも伝えて、それによって世界とかかわっていけると思います。

資料⑨

◆学習のまとめ（学習ノートあとがき）

①　整理してみて考えたことは、アジアとアメリカの考え方、とらえ方のちがいです。やはり、アメリカと日本を第三者の見る目は、あくまで冷静に見ているんだなぁと思いました。アメリカも日本も自分達にとってまずいと思う事は〝くさいものにはふたをしろ〟みたいな所が見えました。とてもいやな印象をうけました。

2学期の国語は、学校を離れても考える事が多かったです。遠く離れている友人に手紙を書いた程です。

TVを見ても、戦争に関するものを前よりもしっかり見れるようになり、決して人事ではないという意識を持てるようになったので、とてもよかったです。

（2年　女性）

②　二学期の授業では、日本の起こした様々な事を知り、おどろきもし、又、悲しくもあった。

今まで、対日感情というものが、何故もたれるのかと、よく理解できない所があったが、今回の学習で、よく理解できるようになった。

そして、いつまたあの日に戻るかわからないという不安も残った。

（2年　男性）